

1917

大正 6 年 11 月
国士館、
現港区南青山に創立

1919

大正 8 年 11 月
世田谷移転、大講堂が完成

1923

大正 12 年 9 月
関東大震災、
被災者の避難所となる

1945

昭和 20 年 5 月
米軍空襲で校舎焼失、
大講堂は教職員・学生等の
奮闘で焼失を免れる

1958

昭和 33 年頃
改修、大屋根は
スレートから金属板葺きへ

1965

昭和 40 年頃
改修、手洗場は撤去される

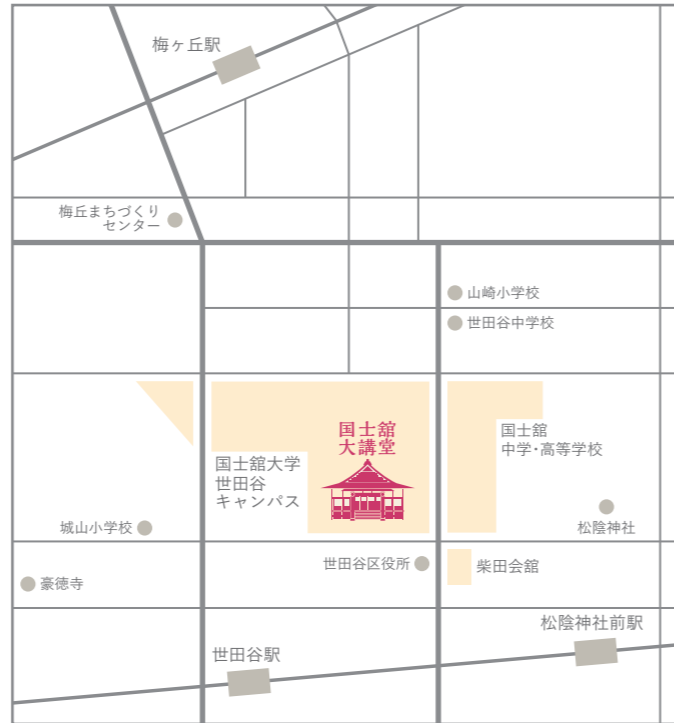
1982

昭和 57 年頃
改修、大屋根は銅板葺きへ

2017

平成 29 年 10 月
国登録有形文化財（建造物）に登録

Access



▶小田急線梅ヶ丘駅下車 >> 徒歩 9 分
▶東急世田谷線松陰神社前駅または世田谷駅下車 >> 徒歩 6 分

国士館大講堂

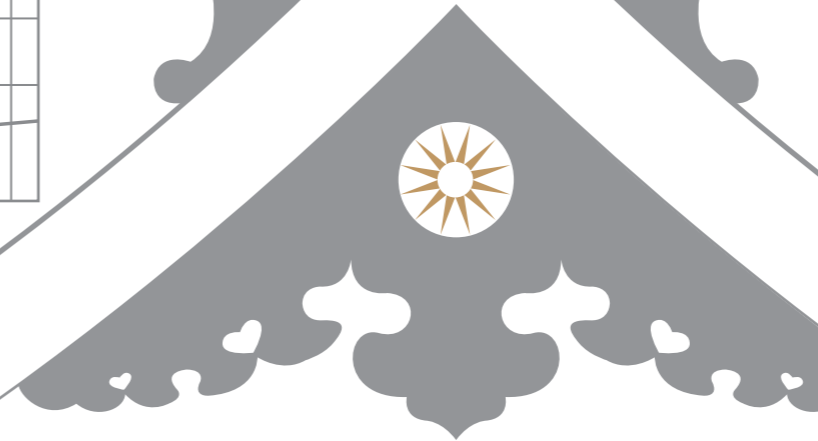
学校法人国士館

〒154-8515
東京都世田谷区世田谷 4-28-1
TEL:03-5481-3111（代）

※見学をご希望の方はお問い合わせください。

編集 国士館史資料室 2019.10.

国登録有形文化財



Kokushikan Auditorium
SINCE 1919



国士館大講堂の概要

1917（大正6）年11月4日、創立者柴田徳次郎ら若き青年たちによって、麻布区笄町（現港区南青山）の民家に創立した国士館は、その2年後、新たな校地を求めて現在の世田谷キャンパスの地に移転しました。1919（大正8）年11月、国士館は、世田谷校地に大講堂をはじめ柔剣道場や寄宿舎を整備して、教育の基盤を整えます。なかでも大講堂は、教育の理念を反映し、あえて西洋風の外観を避けて、伝統的な「純日本式」の意匠で建設されました。また、校地整備費の約半が大講堂の建設にあてられ、まさに国士館を象徴する建物となりました。

完成当初は「講堂」の名の通り、大講堂は学生が勉学に励む教場でした。本学の発展とともに校舎が整備されると、全学生が集まる講演会や式典の場となり、大正・昭和期には、頭山満や渋沢栄一、中野正剛などが登壇しました。

創立期から現存する唯一の建物である大講堂は、国士館のシンボルとして、その歴史とともに建学の精神を今日に伝えています。

文化財概要

名称	国士館大講堂
建築年	1919(大正8)年11月9日(落成式)
構造等	木造平屋建、銅板葺 建築面積 285.34 m ² 延床面積 268.81 m ²
概要	国登録有形文化財（建造物） 2017(平成29)年10月27日登録 第13-0385号
特徴等	講堂の分類における登録文化財としては都内最古。和風意匠の講堂は全国的に類例が少なく貴重。部分改変も完成当時の姿をよく留めている。国士館建学の象徴であり創立期より残る唯一の建物。

大講堂に込めた 国士館教育の理念

1917（大正6）年11月、国士館は、麻布区筈町（現港区南青山）の地に創立しました。その理念は、形式的な「ノート式」の近代教育を批判し、日本の伝統文化を重視する、真の人格者「国士」の養成にありました。国士館の理想は、吉田松陰の「松下村塾」の門下生が近代日本の形成に大きく貢献したように、次世代の社会を担う人材を育成することにあります。

1919（大正8）年の移転に際して、校地に選んだ世田谷の地は、吉田松陰を祀る松陰神社に隣接し、国士館の掲げる教育の理念を体現する理想的な環境でした。この地に建設した大講堂は、「軽薄なるペンキ塗り」のコンクリート造りではなく、あえて寺院風の意匠を持つ木造の建物としました。この「純日本式」の外観を有する大講堂には、西欧の科学智のみではなく、日本の伝統文化を重視した新たな教育で、社会に貢献するという国士館教育の理念が込められたのです。当時の人々の言葉には、大講堂は「日本魂」の表象、また「一本の柱にも血がみなぎっている」などとあり、その建設に込めた思いを感じることができます。

大講堂は、国士館の象徴としてのみならず、国士館が創立した大正期の社会的状況や近代教育史を知るうえで、貴重な建物でもあるのです。



校章入りの鬼瓦



1919（大正8）年の完成時の鬼瓦は、波文様を周囲に配した意匠で、1958（昭和33）年頃の改修でも踏襲されました。1982（昭和57）年頃の改修で意匠が一新され、鬼瓦の中央部に校章があしらわれました。

屋根材の変遷



当初の大屋根には、明治・大正期の洋風建築に用いられた天然スレートが葺かれていました。1982（昭和57）年頃の改修で、現在の銅板葺きに改められ、経年とともに美しい緑青が屋根を覆っています。

折上格天井



湾曲した支輪で天井を一段上げ、角材を格子状に組みあわせた折上格天井は、美しい基盤目状の空間をつくっています。日本の寺社仏閣などでは、絵画を描いた格天井があるように、伝統的な建築物に用いられる格式の高い装飾様式です。

大屋根の構造



軒先に向かう勾配が美しい入母屋造りの大屋根は、骨組の一部にトラス工法を採用することで屋根の構造を強くし、広間に柱がない大空間を確保しています。大講堂は伝統的な寺院風の外観でありながら、西洋の建築技術を取り入れた和洋折衷の構造です。

撤去した手洗場跡



完成当初、西側廊下は北へ延び、別棟の手洗場（トイレ）へと通じていました。1965（昭和40）年頃、10号館建設にあたって撤去され、その空間をふさぐ外壁が補われました。大講堂の北西側の長押や柱には、その跡が残っています。

丸柱



内部空間は、長さ5.7m、直径27cmの杉材の丸柱12本で支えられています。乾燥による割れを防ぐために、あらかじめ背割り（切り込み）が施されており、建築当初の姿を保っています。背割りの向きは、正面出入口から見えないように配慮されています。

108 畳敷の大空間



大広間の床面は、講壇を含めて108畳の畳敷です。現在は、廊下床まで畳敷ですが、完成当初は板張りで、広間との間には段差がありました。1958（昭和33）年頃の改修で、廊下も畳敷になりました。

